

## 令和4年度 愛媛県小中学校教頭会研究主題

研究主題 「未来を生きる力を育む 魅力ある学校づくり」(全公教主題)  
キーワード<自立・協働・創造>

サブテーマ 夢と志を持ち 絆を深めながら可能性に挑戦する子供の育成

### 1 第12期全国統一研究主題「未来を生きる力を育む 魅力ある学校づくり」(令和2～4年度)

一人一人の子供が、社会の変化を乗り越え未来を力強く生きるために、自ら主体的に行動し、他者と協働しながら新しいものを生み出し、課題の解決や改善をしていく「生きる力」を、今こそ子供たちに育んでいく必要がある。そのためには、学習指導要領の趣旨を受け、社会の変化を柔軟に受け止め、社会に開かれた教育課程を実現し、これまで以上に子供たちにとって魅力ある学校づくりを推進していくことが大切となる。

研究主題に設定した「未来を生きる力」とは、子供たちが時代の進展・変化に的確に対応する「生き抜く力」であり、自ら積極的に未来を創造していく意欲を持ち行動する「生きる力」である。また、「魅力ある学校づくり」とは、学習指導要領前文の「よりよい学校を通して、よりよい社会を創る」という理念を受け、社会に開かれた教育課程の実現に向けて、教頭として「魅力ある学校づくり」に取り組んでいくことである。子供たちが笑顔で学校に通い、安心して教育を受けられることはもちろん、保護者や地域住民の方たちに信頼され魅力を感じていただける「開かれた学校づくり」と共に、教職員にとっても魅力ある学校づくりに取り組まなければならない。

そのためには、学校運営を担う教頭がリーダーシップの発揮や職務遂行にあたっての自覚、自らの資質・能力の研さん等の研究を深めていくことがその責務であると考え、3年の継続研究を推進していく。

### 2 第12期の研究の重点

全国統一研究主題には、テーマだけでは表しきれない会員一人一人の課題意識やその時々々の教育課題を表すためにキーワードが設定され、第11期の研究においては<自立・協働・創造>が示された。このキーワードは、第2期教育振興基本計画前文にある『今正に我が国に求められているもの、それは、「自立・協働・創造に向けた一人一人の主体的な学び」である』から引用されている。子供たち一人一人が多様な個性・能力を伸ばし(自立)、個人や社会の多様性を尊重し、共に支え合い高め合いながら(協働)、新たな価値を創造していく(創造)ことのできる資質・能力の育成を目指している。

さらに、第3期同計画『Ⅲ.2030年以降の社会を展望した教育政策の重点事項において、「自立・協働・創造」を実現するための生涯学習社会の構築を目指す』という理念を引き続き継承し、教育改革を進めていく必要があると示されており、第12期においてもキーワードとして継承していく。

### 3 サブテーマ「夢と志を持ち 絆を深めながら可能性に挑戦する子供の育成」

【夢と志を持ち】とは

子供が将来目指したい理想や目標を持つなどの「夢」を抱き、よりよい自分やよりよい所属する学級・学校・地域社会をつくろうとする意欲や態度、すなわち「志」を持つことである。同時に、子供を見守る全ての人の夢と志も指し、子供の成長に関わる学校・家庭・地域が一体となり、「チーム学校」となる願いを込めている。そのためには、「社会に開かれた教育課程」の推進とともに組織マネジメントが鍵となるを考える。

【絆を深めながら可能性に挑戦する子供】とは

人生100年時代における予測困難な変化の激しい社会の中にあっても、輝く未来社会と自分を信じながら、粘り強く可能性に挑戦し続けていく自己実現を目指す子供と捉える。同時に予測困難な場面に

対応するためには、自分だけではなく仲間を信じ共に切磋琢磨しながら絆を深め、協働しながら挑戦し続けることが重要となる。

このような子供たちを育成するには、今後一層、学ぶことと社会とのつながりを意識し、知識の質・量の改善に加え、学びの質や深まりを重視した学習を着実に実施していなければならない。また、子供たちに集団への適応や協調を基盤にした社会性や人間性、豊かな心と健やかな体を育てながら、よりよい生き方や考え方を培っていくことが重要であると考えます。

#### 4 私たち教頭は

人生 100 年時代における予測困難な変化の激しい社会の幕開けとも云える第 12 期の最終年度を迎えた。そんな荒波の渦中にあっても私たち教頭は、「夢と志を持ち 絆を深めながら可能性に挑戦する子供」を育てていくために、教職員の意欲の喚起や資質・能力の向上に力を注ぎ、学校教育の活性化と変革を目指していかなければならない。また、我が国の教育の質を維持し続けるため、教職を目指す優秀な人財を確保・育成することが必要である。未来を担う子供たちを育てる教育という仕事の責務と魅力を、我々教職員が適切なワークライフバランスにより目の前の子供たちにしっかりと向き合い、生き生きと働いていく姿により、発信していくことも重要である。

#### 5 研究の推進方法

研究の推進に当たっては、引き続き継続性(Continuity)、協働性(Collaboration)、関与性(Commitment) の 3 本の柱(3C)を重視する。

- 継続性— 教頭会組織に改編があっても、これまでに解明されたことは何か、残された課題は何かを踏まえた問題解決型の研究を継続的に進める。
- 協働性— 各郡市の全教頭による協働研究を基本とし、教頭としての同僚性を発揮しながら、開かれた関係において協働的に進める。発表内容は、提言者の学校に関わる内容が中心になる場合であっても、組織に属する全員の研究を持ち寄り、各校の実践を互いに取り入れたりするなど、組織的に分担、協議し、研究を深めていく。
- 関与性— 教頭として何をすべきか、どうあるべきか、どう関わるべきかを念頭に置き、各郡市教頭会の課題を明確にし、勤務校での自らの職務遂行や校内研修の課題に関わらせ、そこで得た成果や課題を各郡市教頭会に反映させつつ研究を進める。

#### 6 第 12 期全国共通研究課題の構造

